

ジェームス V. ワーチ著 田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳世子訳
『心の声—媒介された行為への社会文化的アプローチ』

(福村出版、2004年、A5判、213頁、3,400円)

津田ひろみ

本書は、教育心理学者 James V. Wertsch の *Voices of Mind : A Sociocultural Approach to Mediated Action* の邦訳である。ワーチは本書において、ロシアの心理学者ヴィゴツキーの社会文化的アプローチを基に、同じくロシアの文芸評論家バフチンの「声」や「対話」という概念を取り入れることによって、人間の精神活動と社会の相互作用を包括する新しい視点を示そうとした。

まず第1章では、ワーチの基本姿勢がキーワードの説明および援用する理論的枠組とともに示されている。ワーチは、人間の行為を道具や記号によって媒介され、環境から分離することはできないものとして定義し、対話の多声性へのアプローチを通してヴィゴツキーとバフチンの理論をそれぞれの範囲を超えたひとつの理論的枠組みのもとに結びつけようとしている。

第2章は、ヴィゴツキーについての論考である。ワーチは、ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」理論を評価し、個の文化的発達過程を社会的相互作用の中に位置づけている。すなわち、人間の行為は道具や記号に媒介されており集団の中でのみ意味をもち発達する可能性をもつと考える。ヴィゴツキーは社会文化的状況の中でも特に学校教育に注目し、ことばの形式が教師—子供の「精神間活動」にどのような枠組みを与えるのか分析している。

第3章では、ヴィゴツキーの理論を発展させバフチンの概念を導入している。つまり、社会文化的な状況と個人の精神機能は、「媒介された行為」によってつながることを明らかにしている。バフチンの「声」という概念が紹介され、それは動的な過程、つまり、主体の意図や世界観を反映するものであり、社会的環境の中でのみ存在すると説明している。バフチンによれば、2つ以上の声（＝発話者）が出会って相互活性化したときそこに「意味」が成立する。したがって発話は必ず誰かに向けられるものであり（宛名をもつ＝address性）、分析の対象は語や文ではなく発話でなければならないという。バフチンのこのようなアプローチは超言語学と名づけられ、語用論、談話研究に重なるものであると考えられる。また、バフチンの「多声性」とは発話者個人の声と「他者」の声の双方を指すが、後者は周囲から直接取り入れた他者の声だけでなく、話し手自身の経験に内在する他者の声まで含むものとする。そのように考えると、パロディは話し手以外の声の重なりを表すものであり、腹話は自身の中で他者の声を繰り返すという多声性のひとつとしてとらえることができる。

第4章では、ワーチはヴィゴツキーとバフチンが共通に述べている「意味」に注目している。

バフチンはロシア文化の集団主義的な伝統を反映して、意味は常に集団の生活に基礎をもつとする。したがって言語使用者は意味を集団社会から「借りる」のである。これは一種の「貸借メタファー」であり、発話者の中にある複数の声の存在を言い換えたものであるといえる。ワーチはバフチンの意味理論の特徴を次の4つにまとめている。1) 腹話術の概念：孤立した個人が発話や意味を創造することはできない。2) 「導管メタファー」の否定：送り手だけが意味を符号化し受け手が受動的に解読するのではなく、双方向のやりとりの中で意味も変化していく。3) 権威ある言葉として引用された他者の言葉は相互活性化が弱い。4) 字義の意味は言語学のイデオロギーを反映するものであると批判し、むしろジャンルを特定し個々のコンテクストに基づく動的なアプローチをとる。

ワーチは親子の会話の例を挙げて、ヴィゴツキーの“Inner Speech (内言)”理論に基づき次のように分析している。母親の質問は子供の中で前提化され、答えに対応する質問は内言として子供の内部に生起するため、子供の自己中心的言語は次第に省略され述語中心的となる。権威ある発話(母親)の意味を取り込みながら子供は内部で対話しているのである。外的干渉により子供の思考装置に新しい意味の生成メカニズムが形成されていると考えられる。

第5章は、ヴィゴツキーの道具と記号的媒介のアナロジーの限界、すなわち媒介手段の多様性を十分説明することはできないという批判から出発する。ヴィゴツキーの「所有メタファー」では個人が能力を有するかどうかという区別にとどまり、媒介手段の多様性を説明することはできない。そこでワーチは「道具箱アプローチ」を提示する。さまざまな媒介手段が道具箱にどう配置され、どれを選択するか、というメタファーにより、多様性を説明できると主張するのである。

道具箱の基本的枠組みを明らかにするために、トゥールヴィステの論じる「異種混交性」概念の3つの分類を示し、道具箱アプローチとそれぞれを関連づけて説明している。1) 発生的ヒエラルキーとしての異種混交性：道具箱には道具が低次から高次へと特定順序で獲得され、配置される。2) 発生的ヒエラルキーなき異種混交性：異なる発生段階で異なる道具が獲得されるが、有効性に必然的な序列は存在しない。3) 非発生的異種混交性：発生順、有効性による序列化なしに道具が収められており互いに独立している。ワーチの理論を理解するうえでとりわけ重要なのは、トゥールヴィステが示す「活動指向型」アプローチであろう。新しい活動形態が新しい思考タイプを生み出し、文化における役割に応じて保持され機能すると説明する。

具体例として挙げられている教室談話では、ヴィゴツキーは最近接領域における教師と生徒という力の差のある発話の特徴に注目して分析しているのに対し、ワーチは生徒個人の〈生活史と個性〉という視点から出発し、教師の指示により〈科学的概念〉のレベルへスイッチし、さらに〈記号タイプに基づく活動領域〉へと移っていく〈記号的挑戦〉であると分析している。「道具箱アプローチ」に基づけば、必然的な序列が存在しない発生的ヒエラルキーなき異種混交性が見られ、「活動理論的アプローチ」によれば、活動状況と生活領域の違いが多様な思考のタイプを生み、多種多様なことばのジャンルを存在させると説明する。つまり、人間のコミュニケーションと精神機能の媒介手段は異種混交性の概念によってより深く理解されるのである。

第6章はまとめの章で、本書の目的が「人の行為がいかに文化的、歴史的な、そして制度的な状況に位置づけられているかを解明すること」であると述べている。そしてヴィゴツキーとバフチンは、媒介手段は「行為の一部である限りにおいて」役割を果たすという基本原則に基づいていること、「媒介された行為」が最小の分析単位であり、「媒介 - 手段を - 用いて - 行為している - 人」が切り離すことのできない最小単位の行為主体であることを確認している。

また、本書の基本概念である「社会文化的状況」とは、どんな状況にも明らかに見られる「文化的かつ歴史的かつ制度的」な社会に対する3つの視点であり、どれかひとつ切り離して扱うことはできないと述べている。

この最終章でワーチは2つの新しい概念、「特権化」と「相互教授」を提示する。

特権化とは、ひとつの媒介手段がある特定の社会文化的状況で、他の手段より適切かつ効果的であるということである。「支配」が制止する概念であるのと比較すると明らかなように、「特権化」の概念は行為を一方向的に規定するものではない。差異に注目し、相互に規定しあう動的な関係が見られる。そして特定の社会文化的状況のなかで特権化のパターンを習得する（＝どれがより適切な社会的言語かを判断する）際には、精神間機能が精神内機能へ、換言すれば、外的干渉が徐々に自らに課すような干渉へと移行する変化が起きていると分析する。これは学習者の自律性の発達を心理学の側面から説明するもので、教育に応用できる概念であると考えられる。

次に、特権化の一側面として、パリンサールらの相互教授法に言及し、生徒の上達は「外的干渉の精神内過程への変換（ワーチ）」と説明している。相互教授の理論によれば、読解指導は「教師の発話の形態を真似ること（腹話）により（中略）積極的な読み手とテキストの声の間で相互活性化が起こる」過程であると分析される。バフチンの多声性は、ここでは話し手（生徒）の経験に基づく声に加え、教師から直接取り入れた声も含む。しかし、読解能力の低い生徒は教師との対話構造を内化することができず、それを補うには明確な腹話の手法、繰り返しを必要とする⁹⁷と付け加えている。

ワーチは最後の部分で「対話をふたつの対置された声とは見ず、個々の話し手を超えたときのみ十分解釈することができる」と述べている。ここでワーチは、個々の発話のやりとりによって形成される多声性を超えて、その発話を取り囲むより広くより一般的なレベルの力、ワーチによれば「文化的、歴史的、制度的な力」、に注目すべきだという。すなわち、発話の結果にではなく、ワーチはあくまで発話のプロセスに重点を置こうとしているのだ。

以上に述べたように、本書はコミュニケーションを新しい視点からとらえるとともに、語用論や談話分析、殊に教室談話分析に対し深い洞察を与えるものである。社会や文化といった側面を、静的な要因としてではなく、人間の精神活動と相互作用しながら思考や学習に働きかける動的な要因としてとらえているのは興味深い。そして人間の精神過程を社会と関連付け、学際的アプローチによって分析しようというワーチの試みは、紹介されている数々の理論と相まって意味深いものと思われる。

一方、全編を通して印象に残ることは、ワーチ自身が述べているように、本書が腹話の手法をとっていることである。ヴィゴツキーやバフチンをはじめ数多くの理論を引用しながら論を進め、それらを包括した上にワーチ自身の論が組み立てられている。

本書に紹介されている道具箱アプローチや相互教授、多声性など新しい概念を、教育の場どのように実現させていくかが今後の課題となろう。

文献

- 阿部軍治（1997）『バフチンを読む』 日本放送出版協会
石井恵理子（1997）「教室談話の複数の文脈」『日本語学』16(3), 明治書院 21-29.

- 茂呂雄二 (1997) 「教室の声のエスノグラフィー—授業の談話分析の課題」『日本語学』16(3), 明治書院 4-12.
- 茂呂雄二 (2001) 「発話の型—教室談話のジャンル」茂呂雄二編『対話と知—談話の認知科学入門』新曜社 47-75.
- Richard-Amato, P. A. (1996) *Making it happen: Interaction in the second language classroom, Second edition*. NY: Longman.
- 當間千賀子 (2001) 「社会文化的、歴史的営みとしての談話」茂呂雄二編『対話と知—談話の認知科学入門』新曜社 152-174.